

査が終わったなら、出土した遺物や記録した図面などを整理し、「発掘調査報告書」を刊行して、発掘調査は完了します。

### 3 今回の発掘調査では何がわかったの？

調査の結果、平安時代の竪穴住居跡が7軒、土坑4基、土坑よりも小型の穴（小穴）が20基見つかり、この場所に集落が存在したことがわかりました。

竪穴住居は地面を掘って床をつくった半地下式の住居です。日本では縄文時代から平安時代末まで一般的な住居として利用されました。「平安時代に竪穴住居に住んでいた」と聞くと意外に感じられるかもしれませんが、長野県を含む東日本では平安時代まで竪穴住居が活躍していたのです。【写真3】

さて、多くの遺跡で見つかる竪穴住居跡ですが、残念ながら住居の全ては残っていません。屋根は草や土で葺かれているため、長い年月のう



写真3 復元竪穴住居跡（科野の里）

ちに朽ちてしまっており、残らないのです。火事に遭ったり、災害で一気に埋まったりしたことで稀に屋根が残る例もあるのですが、ほとんどの場合は地面に掘った竪穴の部分のみが見つかります。今回の調査でも、見つかったのは竪穴の部分ですが、そこには生活の痕跡や住居の構造を知る手がかりが残されていました。

写真4は、今回の調査で見つかった竪穴住居跡の一つです。方形の竪穴住居跡で、一辺が約5.5mあります。床面に穴がいくつかありま



写真4 3号竪穴住居跡

すが、このうちの4つが屋根を支える柱を立てた穴と考えられます。【写真4】

また、住居の東壁（写真上側）にはカマドの跡がありました。カマドは古代の台所で、炉に比べて熱を効率よく使うことができます。カマドは大部分が壊れてしまっていたですが、構築材の一部と、火を受けて地面が赤く焼けている部分を確認することができました。カマドの跡は、7軒の竪穴住居跡のうち4軒で見つかっています。写真5の竪穴住居跡では、カマドの周りから坏や甕などの土器も出土しました。坏は食器、甕は主に煮炊きに使われ

た土器です。カマドで食材を調理し、みんなで楽しく食事をしていたのかもしれない。【写真5】、【写真6】

土器は時代によって様々な特徴があり、遺構の時期を推定する重要な資料になります。今回の調査で竪穴住居跡から出土した土器は、形や製作技法などから平安時代の土器と判断できたため、竪穴住居跡も同時代のものであると考えられます。

7軒の竪穴住居跡は、住居どうしが近すぎたり、重なりすぎることなく分布していました。住居の建替えなどはず、一定期間居住した後には別の場所に集落が移動し

た可能性が高いと推測しています。

### 4 おわりに

現地での発掘調査が終了し、遺跡はすでに埋め戻されています。これから新複合施設が建設され、この場所の歴史が新しく積み上げられていくのだと思います。この場所にあった遺跡はなくなってしまうと思いますが、発掘調査によってその記録を残すことができました。発掘調査を通し、千年以上昔からこの場所に人々が暮らしていたことの証を未来に伝えて行くことができれば幸いです。

（篠井ちひろ）



写真5 4号竪穴住居跡



写真6 カマド周辺の土器